

対魔導学園35試験小隊

2. 魔女争奪戦

柳実冬貴



ファンタジア文庫

1943

Chapter

プロローグ	5
第一章 記憶喪失の魔女	15
第二章 魔女、入隊	56
第三章 相性最悪	87
第四章 模擬戦トーナメント	127
第五章 死霊術師は笑う	188
最終章 背負う者達の力	254
エピソード	304
あとがき	315

口絵・本文イラスト
切符

プロローグ

「——許さない……!」

二階堂マリは、憔悴しきった意識に鞭を打ち、殺意を前方に定めた。

ここは郊外の朽ち果てた廃屋。魔女狩り戦争後の宗教規制の煽りを受けて、廃墟と化した教会だった。

ステンドグラスの下、埃の積もった主祭壇の前で、本を片手に佇む青年がいた。

死霊術師ホーレントッド。幻想教団幹部。死霊術師であると同時に、錬金術師であり、召喚師であり、教会の元神父でもある、S級危険指定の歴とした魔法使いだ。

「許さないって、何がですか？ マリさん」

薄気味の悪い笑みを浮かべる彼に、マリは激怒して髪を逆立てる。

マリの体内からあふれ出た魔力が、周囲の椅子や燭台を震動させた。

「あなたは約束を守らなかった……私に嘘を吐いた！ 罪の無い一般人を巻き込まない、それが私の協力を得る条件だったはずでしょう!？」

ホーンテッドが本を閉じ、後ろに手を組んでマリに向かって歩き出す。その歩みは不気味で、ヒタヒタと近づいてくる幽鬼のようで薄ら寒い。

「嘘なんて吐いてませんよ。この世界に、罪の無い一般人なんて存在しないですから」とんでもない屁理屈を吐き出して、ホーンテッドは極上の笑みを浮かべる。

「それに、たくさん観客がいないとつまらないでしょう？ 英雄召喚ですよ？ 偉人さん

ですよ？ 遠路遙々黄泉の国からお招きしたっていうのに、観客が審問会の人間だけっていうのは、味気なさすぎるじゃないですか。僕の思惑通り、すごく盛り上がりませんでした？」

ホーンテッドは身を振らせて歓喜に震えた。

身体を痙攣させ、熱い息を吐き、定まらない視線を彷徨わせながら、英雄テロをしかけた時の、人々の悲鳴を思い出す。

ホーンテッドは頬に涙を伝わせた。

「……今思い出してもたまらない。なんとという感情の発露。あれこそが人間です。あなたもそう思うでしょう!? 生と死の狭間で輝く一瞬の煌めき……つ、雑踏もいいですが、やはり素晴らしきは断末魔！ 何より——」

恍惚に涙するホーンテッド。その姿は、狂人と呼ぶに相応しかった。

マリの瞳が深紅の色に染まり、魔力が爆発する。周りの椅子や燭台は弾け飛び、壁や柱には一瞬で輝が走った。

「僕はあなたのその表情が見たかった！ ああつ、いいですねそうですねそういうのが見たかった！ あなたにはその表情がとっても似合いますよ！」

身悶えする男を前にして、マリは目を閉じ、そして己の中で判決を下す。

この男を少しでも信じたのが、そもその間違いだった。この男は全てにおいて害悪だ。

故に到達する結論は一つだけ。

消滅。細胞の一片すらも残さぬ究極の終わりを与えなければ。

「——ふつざけんじゃねえ！」

瞬間、マリの周辺に魔法陣が出現する。

マリの魔法陣は形容し難い色をしていた。強いて言うならば、流動する七色。

それはまさに、極北の空に映る幻影のようだった。

脳内で練り込まれた術式を己の中の体内幻器にぶち込むイメージにより、魔力が体内からあふれ出る。

瞬間、マリの魔法が発動し、半径二メートルほどの太さのレーザーが、ホーンテッドに

襲いかかった。

光はまるで雲の裂け目から降り注ぐ柱のように、ホーンテッドを飲み込んだ。光の柱は教会の壁をかき消し、空に伸びて消えた。

マリは膝に手をつき、荒い息を吐く。

「……くそ」

悪態をついたのは、自分の攻撃が失敗したことを、肉眼で確認したからだ。

土煙があがる半壊した教会に、月明かりを浴びて、ホーンテッドが健在していた。

身体の周りに、黒々とした障壁を展開しながら、ニィ、とホーンテッドは口元を歪める。

「――絶望の庭」

告げられる魔法名。直後、マリの足下に黒い影が出現し、その中から漆黒の茨が飛び出してきた。茨は瞬時にマリの身体に巻き付き、彼女を拘束した。

契約召喚魔法《絶望の庭》は、彼の意思によって蠢く茨と沼の魔法生物の集合体だ。本来は《絶望の花》と呼ばれる単一の魔法であり、危険性はたいしたことはないが、集合体として召喚すれば脅威となる。魔法生物の集合体の召喚は、魔力量が規格外な魔女・魔法使いにしかできない芸当だった。

「こんな場所で攻撃魔法を使うなんて感心しませんね。仮にもあなたは僕と同じ古代属性

ウイザード保持者なんですよ。もっと分別をもって魔法を使用しなくては、下手をすれば街が消し飛んでしまいます」

思ってもいない説教を垂れて、ホーンテッドは神父服についた汚れを手で払う。

「詠唱と魔法名を告げずに、あれほどの破壊力を維持できるとは、さすが極光の魔女と言うべきでしょうか」

「……………」

「跳ねつ返りなのはあなたの魅力の一つだとは思いますが、いいんですか？ 僕への攻撃は即ち、幻想教団全体への裏切りです。こちらで保護したあなたの家族……施設の子供達が無事では済まされませんよ？」

ホーンテッドの脅迫じみた物言いに、マリはギチリと歯ぎしりをして、全身の力を抜いた。

「素直なマリさんが僕は好きですよ。たまに暴走するのも、愛らしくて好きですけどね」

「……………」

「さきほどの攻撃には目を瞑ります。さあ、一緒に本部に帰りましょう」
ステンドグラスの割れ目から降り注ぐ光を浴びて、ホーンテッドがマリに手を差し出してくる。

マリを拘束していた茨が灰と化し、解放されたマリはうなだれたまま、よろよろとホーンテッドの手を取ろうとした。

が、びくりとホーンテッドの指先が震えた。

「……申しわけありません。どうやら、お客様のようです」

いきなりそんなことを言われ、マリが何事かと思考を巡らせていると、突然背後のドアが勢いよく蹴破られた。

「異端審問官だ！ 頭の後ろに手をおいて跪け！」

振り返ると、異端審問官男女二名が、ライフルを構えている。

いや、よく見れば制服が違う。この二人は、対魔導学園の試験小隊だ。

マリは戦慄した。ホーンテッドはこの二人を見逃しはしない。

「――逃げて！」

床を蹴ろうとしたが、足に茨が絡みつぎ、その場に転倒。

直後、絶望が始まる。

……ズギゅル……

水気を帯びたナニカが蠢いたかと思えば、教会内部が漆黒に染まり、床、天井、壁の全
てから、茨が一斉に飛び出した。その茨は迷うことなく、学生に襲いかかる。

「うわっ、なんつ——ぐおえっ！」

少年に、茨が一気に肌が見えなくなるほど絡みついた。

「い、いや……なに、これ……！」

その光景を見て怯える少女。彼女は異形を前にして、一步一步後ずさった。

されど、行く先に三步目を踏み出した時、蠢く影が少女の足を捕らえた。

「さやああああッ！」

足を取られ、転倒する。影は、底なし沼のように少女を飲み込んでいく。

「た、たすけ——い、痛ッ……？ やだっ、中に何かいる！——痛い痛い痛い！ 助

けて！ 誰か、痛い痛——い——」

悲痛な悲鳴は途切れ、少女は完全に沼に飲み込まれた。

マリは我に返り、足の茨を引きちぎって、拘束された少年に走った。

少年はすでに、茨の締め付けによって肉をずたずたに引き裂かれていた。

茨は、苦しみを与えるために、あえてゆつくりと少年に食い込んでいく。

「動かないで！ 動かれるとあたしの魔力が流せない！」

「ほ、ほ……棘が……ごぼっ……に……」

「助ける！ 助けるからじつとして！」

マリは茨を処理しようとする。しかし、それぞれが別個体であるのか、連動しておらず魔力による拒絶反応が引き起こせるの一本ずつだった。

「ちくしょ……！　こんな、こんなの！」

誤って少年に魔力を流し込んでしまえば、彼の身体が拒絶反応で壊れてしまう。

魔法生物を嫌がらせるために練り込んだ魔力など、人間に流せばひとたまりもない。

一本ずつ、必死に茨を引きはがす。

「無駄ですよ。この庭の植物は、今までため込んだ魔力が尽きるまで延々増殖します。たとえ僕が死んでもね」

ホーンテッドが冷ややかに、主祭壇の上に座りながら笑いかける。

茨はすでに肉を裂き、骨にまで到達していた。

マリはそれでも、ひたすらに少年を救おうとする。

ホーンテッドは、やれやれと首を振った。

「あなたの魔法への思いは……失礼ですが夢物語だ。正しさで言えば、まだ異端審問会の認識のほうが近い」

「くそっ！　くそっ、ちくしょ……！」

「『魔法は人を幸せにするためにある』……でしたっけ？　残念ですが、それは誤りと言

わざるを得ない」

「あつ……ああつ」

「——元来、魔法とはこういうものだ」

ホーンテッドがそう告げた直後、マリの目の前で少年が完全に引き裂かれた。

血と臓物が飛び散り、マリを汚す。マリはただ呆然と、そこに立ち尽くしかなかった。手の平を汚す少年の血を見て、マリの瞳から涙が零れる。

意気消沈したマリは、その場に膝をついた。

同時に、再び教会のドアが開かれた。差し込む眩しい光。攻撃的な照明の数々。

そして、こちらに銃口を向ける、複数の人影。

「——異端審問官『魔女狩り』だ。貴様を殺人の現行犯で逮捕する」

「……」
「尚、貴様に秘密権は無い。弁護士を雇う権利もない。これより、全ての人權は剥奪される」

マリは後ろを振り返り、主祭壇を見る。

すでにそこには、ホーンテッドの姿は無かった。

もはや、マリには抵抗する気力もなければ、意思も残されてはいない。

銃口を頭に突きつけられ、手錠をかけられ、無理矢理立たされた。終わった。このまま審問官によって最奥監獄へと投獄されてしまうのだろう。そう思った時、自分のポケットに入れてある財布の中で、何かが熱を持つのを感じた。普通の熱ではない。魔力的な熱だ。

「——これ、って」

手錠に繋がれながら、マリは戦慄する。

（——まずい！）

咄嗟に自分の頭の中に防壁を張るが、少しばかり遅かった。

パチン——！

頭の中で、何かが切れるような音がして、マリはその場に倒れた。

「おい貴様！ 何をしている!? おい！ どうした!?」

薄れていく意識の中で、審問官の声がガンガンと響く。

マリは、自分の頭の中から記憶が失われていくのを感じながら、静かに目を閉じた。

第一章 記憶喪失の魔女

対魔導学園最深部、禁忌区域最奥監獄は、学園の暗部である。

地上の罪の無い魔女が仮設住宅で生活している区域とは違い、最奥監獄には重犯罪者達が投獄されている。施設には、魔法を使わせないためのあらゆる手段が用いられており、重犯罪者には反人道的とも取れる処置が施されていた。

「いつ来ても辛気くさい場所だねえ……鐵君もそうは思わないかい？」

最奥監獄の薄暗い通路を歩きながら、対魔導学園理事長、鳳颯月は横を歩く男に尋ねた。漆黒の制服に身を包むその男の胸には、異端審問官であることを示す刺繍が施されていた。対魔導を象徴する、魔法陣が十字に切り裂かれたような、独特なエンブレム。さらにその隣には、首の無い騎士が描かれた、黒い部隊章。

黒は、対魔導捜査一課第零職滅機動隊、通称「エグゼ」を意味する。エグゼとは、対魔導兵器であるレリックイーターを所持する者達で構成された、特殊部隊のことだ。

「自分は慣れていますので」

男は、淡々と答えた。

彼の名前は鐵隼人。エグゼの隊長を担っている、事実上、魔女狩りで一番の実力者だ。

颯月は隼人のそつけない態度を尻目に、周りを見回す。

通路の壁には、まるで棺桶を模したような機械仕掛けの装置がいくつも並んでおり、ガラス張りの覗き窓のような箇所から、青白い光が漏れだしていた。

「まるで墓場じゃないか。こんな場所に慣れてしまおう君は、素晴らしい神経の持ち主だと賞賛しないでもないよ」

「恐縮です。が、この施設をお作りになったのは、会長だと聞き及んでおります」

「作るように指示したのは私だけど、こんなに不気味にしろとは言ってないよ」

颯月が不満を口にしながら、棺桶を間近で見やる。

覗き窓から棺桶の中を見れば、そこには人が眠っていた。

この最奥監獄にずらりと並ぶ棺桶のような装置は、鉄の処女と呼ばれる魔女・魔法使いを封印するための独房だ。

危険度の高い魔女の場合、通常の抗魔素材を用いた牢屋では不十分であり、覚醒状態で拘束するのが難しいため、この装置が作られた。

中に封印された魔女は強制的に仮死状態となり、夢すらも見ることができない。

近年では魔女の魔力を抑制する首輪型の装置も存在するが、コストパフォーマンスが悪いため、強力な力を持つ魔女はこうして眠らせておく他無いのである。

「それで？ 例の女の子の様子はどうか？」

「捕縛時の昏倒の後、記憶のほとんどを喪失したようです」

「記憶喪失……面倒だなあ」

「呪符の忘却魔法による情報漏洩防止を狙ったものと思われれます。時が経てば記憶の回復が始まると、薬師は診断しています」

「彼女の正体は、わかっただのかい？」

問われると、隼人は視線だけを颯月に向けた。

「名前は二階堂マリ。古代属性保持者、三年ほど前から指名手配中の『極光の魔女』本人で間違いないかと」

「例の不殺の魔女かい？ 地位的には微妙なところだが、魔女としての実力は確かだな。

確か、前に捕縛した幻想教団の下っ端の脳から、いくつか情報が引き出せていたね」

「ええ。境界線の児童養護施設出身であることや、彼女が幻想教団に協力せざるを得なかった動機までは、すでに調査済みです」

颯月はニヤリと笑う。

「自爆用じゃなくて忘却用の呪符だったことは気がかりだが、奴らの上が隠蔽に失敗したと知れば……やっぱり攻めてくるかな？ 彼女を殺すか、取り戻すために」

「可能性は充分かと」

「だったら、忘却の効果が切れるまで、利用のしがいがありそうだな」

「……と言いますと？」

「幻想教団が大規模な活動を起こしたことなんて滅多に無いからね。先月の英雄テロのようなことは、滅多にしてこない連中だし、情報源は少しでも多い方がいい。大物がくるのも雑魚が大量にやってきてくれるのも、どっちも大歓迎だ」

「……わかりかねます。会長は、いったい何を」

「わかんないのかい？ 釣り師の話だよ」

そう言つて、颯月は釣り竿をキャストするジェスチャーをしてみせた。

隼人は目を細め、颯月の意を理解した。

二人がしばらく道を行くと、やがて終点が訪れる。

終点には、他のものと違う十字の形をした鉄の処女が一体置かれていた。覗き窓からは青白い光ではなく、赤い光が漏れだしている。

その鉄の処女の周りでは、鍛冶師らしき白衣を着た者達が計器の調整を行っていた。

颯月は手を上げて、忙しなく動く彼らに告げる。

「ロックを解除して、鎖も外してくれたまえ」

白衣達が顔を見合わせ、「よろしいのですか？」と問うてくる。

颯月が早くしろと手を振ると、白衣達は棺桶の両サイドに設置された四つのレバーに手をかけた。

金属の擦れ合う音と、激しい蒸気が吐き出され、視界を覆う。

鉄の処女の扉が開放され、中からあふれ出た蒸気が地を這った。

中にいたのは年端もいかない、少女だった。

少女は、裸同然の状態で夥しい数の鎖で繋がれており、鍛冶師達はその鎖を一本一本バ―ジしていく。

全ての拘束を解かれた少女は、床にたたきつけられると、短くうめき声を上げた。

その拍子に少女が目を開ける。その瞳に最初に映ったのは、恐怖と焦りだ。

自分の状況を理解できず、困惑している様子だった。

「なっ、なにこれ!? どうなつてんの!? なんで、あたし裸……? あんた誰!?」

何も覚えていないのか、少女は震えながら、目の前に立つ颯月を見上げた。

颯月は、にっこりと微笑み、裸の彼女に自分の白いコートを被せ、肌を隠してやった。

そして、記憶を失った魔女——二階堂マリに、颯月はこう告げる。
 「やあ、対魔導学園へようこそ！ 二階堂マリ君、君の入学を歓迎するよ！」
 マリは、意味が全くわからずに、ただひたすら首を傾げるだけだった。

「えー、あー、術式と魔法陣と詠唱の関係については、前にも話したと思うが、深い関連性がある……えー、まず術式というのは、効果的に魔力を魔法に変換するためにもっとも重要な、いわばプログラムのようなものであり……」

眠気を誘う教師の声。術式学の授業は、いつだって教室内が静まりかえり、たとえ成績優秀な生徒であつても睡魔に撃沈してしまうことのほうが多い。

のだが、最近はどうにも状況が異なっていた。

妙に教室内が騒がしい。教師の声だけでなく、ヒソヒソと囁く声が響いている。

「あの噂、本当なのかしらね？」

「英雄を倒したのは雑魚小隊ってやつか？ 俺は信じないね」

「でも実際に見た奴が結構多いって話だぜ。もつとも、ほとんど学園を辞めちまったみたいだけ。ふぬけどもめ」



「あなたはあの戦いに参加してなかったせに何言ってるの。魔女狩りも出動してなかったし、騎士団は壊滅状態。誰が英雄を倒したのか気になるわよね」

「なんか、紫色だか青色だかの鎧騎士みたいのが倒したって話もあるよな」

「だはは、恐怖で幻覚でも見たんじゃないかねえのそれ」

「その鎧騎士みたいなやつが、雑魚小隊の隊長にそっくりだったって話も」

「あー俺もそれ聞いたことあるわ。レリックイーターの一種かもしれないんだろ?」

「じゃあ、あいつ魔女狩りってことか? しかもレリックイーター所持の?」

「何それ笑える。だって、あの人、銃がまともに使えないんでしょ? 剣でどうやって英雄を倒したっていうのよ、バカバカしい」

生徒達が一斉にタケルを見やる。

タケルは所在なさそうに教室の真ん中の席で、縮こまっていた。こういう注目のされ方は初めてだったし、正直あまりいい気はしない。いつそ噂の大半が事実であると告げてしまえば、少なくとも疑いの眼差しのようなものは向けられないはずである。

実際は、それもままならない。

理事長から、タケルがレリックイーターの契約者であることは、外部に漏らしてはいけないと念を押されたのだ。今のタケルは学生であると同時に、臨時の魔女狩りとして審問

会から扱われているため、このあたりの規律は守らなければならない。

「でも実際、草薙の周辺の変化はめまぐるしいものがあるな」

「確かに、鳳桜花に続いて……あの子だろ?」

「な? 絶対あれ兄妹じゃないって。全く似てねえし」

「義妹にしても変な話よね……謎だわ……気がつくといなくなったかと思えば、気がつく」と草薙君のそばにいるし

生徒達の視線がタケルから外れて、彼の真横に移る。

真横の席。本来なら生徒同士の机は一メートル間隔程度に離れているはずなのだが、その席だけは、タケルの席とびったりくっついていてる。

明らかにおかしい配置だ。タケルの心情がままならないのは周りの視線だけでなく、その奇妙な隣人のせいでもあった。

タケルがしかめっ面をしていると、不意にくいぐいと服を引っ張られた。

実に控えめな引力だった。

加えて、

「……お兄ちゃん」

お兄ちゃん……と声をかけられて、タケルはやむを得ず首を向けた。

瑠璃色の瞳に、瑠璃色の髪。瑠璃色のドレスを着た少女が、真横に鎮座している。

「質問があります、お兄ちゃん」

彼女の名前はラピスラズリ。今月から、一応第四学園の転校生という名目でタケルと同じクラスになった。

彼女の正体は、人間ではない。先月の英雄襲撃事件の最中にタケルと契約した、レリックイーターシリーズの一つだ。正確な本名は《The Malleus Maleficarum Type-Twilight 'Mistkenn'》と言う。強力な魔導遺産が意思を持ち、人型を取ることは過去の記録に記されているものの、現代にはほとんど残存していないため、非常に貴重な存在として扱われている。

それ以外の詳細は一切不明。契約したタケル本人も、理事長、鳳颯月から極秘ということで何も教えられなかった。

そんな不可解な存在がタケルの正式な得物になったわけだが……。

問題なのは、ラピスの口走った「お兄ちゃん」という呼び方だった。

話はひと月前に遡る。

「レリックイーターの中でも、ミスティルティンは特殊だね。基本的に契約者のそばにいたがるんだ」

「……はあ」

「だから、かなりの割合で君の日常に入り込むことになる。あの子は人型になるのが好きだね。だから一般生徒を混乱させないように、一応転入生として君と同じクラスに入れて、そこらへんは把握しておいてね。あと、『魔女狩り化』した君の姿を見た生徒は少なからずいると思うから、そのへんは何を聞かれても黙っておくように。一応ね、部外秘つてことになってるから、建て前だけだ」

「……それはまあ、了解です」

「ラピスの偽名や偽の戸籍も用意したんだよ。これね。一応目を通しておいて」
そう言って、颯月はタケルに紙切れを渡した。

不思議そうに首を傾げながら、タケルは紙切れに視線を落とす。

顔写真を見て、次に名前。

草薙ラピス。

「——っておいッ！」

「ハッハッハ！ 語呂悪いのは勘弁な！」

「待ってくださいよ！ いくらなんでもこんな通るわけないでしょう!？」

「常にべったりだと勘違いされて困るだろう？ 兄妹なら体裁も立つじゃないか。それと

もなに、不満？ 姉がよかつたかね？」

『不満とかそういう問題じゃないでしょう！ だいたい俺には妹がすでにいるんですよ！』

『妹は何人いたっていいものだろう。うらやましいぞ、このう』

『何言ってるんだあんた!』

『これはもう決まったことだから。ラピスのことは今後、妹として人前では扱うように』

『いや……そんな……はあ!』

『がんばってくれたまえ。義妹だから多少過激なスキンシップも許容されるよ。やったなお兄ちゃん。H A H A H A このドスケベ』

……………。

(やったなお兄ちゃんじゃねえよ！ あの腐れ理事長ッ……!)

正直、いきなり他人が妹になるなどという状況は願い下げだった。しかもあの腐れ理事長は、何をちやっかりラピスに「お兄ちゃん」と呼ぶことを強要しているのか。

だいたいタケルには本物の妹が一人いるのだ。事情があつてなかなか会うことはできないが、斑鳩が彼を「シスコン」と評するほどに、タケルはその妹のことを溺愛している。故に、タケルにとってはこの展開は実に腑に落ちない。

ただ一つ重要なことは、もしもタケルが彼女との契約を解除した場合、死が待っているということだ。タケルの上半身と下半身は、ラピスの魔力によって無理矢理接合されているため、解除すれば元の死体に逆戻り。

タケルは颯月やラピスには逆らえない立場に置かれている。

だから今回のラピスの質問にも、答えなければならぬ。

たとえこれが、今日一日で一〇四回目の質問であつたとしても。

「……し、質問？ なに、かな」

「術式字とは、どういう意図で必修科目に含まれているのでありますか？」

俺に聞くなよ、と言いたくもなるが、タケルはぐっと堪える。

「えと……捜査の上で魔法の痕跡を調べるのに必要だつて……言われてるな。アナ……なんだっけな……なんとかフィルター？ つていう機械を通して事件現場を調べると、魔法陣の跡とか、魔力の残留が確認できる？ そのサンプルを採取して、さらに強力なフィルターを通すと、どういった術式で魔法が使用されたのかわかる……とかなんとか」

「なるほど。確かに、術式がわかれば使用された魔法も判明しますし、治療のための抗魔物質の選別に役立ちます」

納得です、とラピスは単調に言う。

これで質問は終わりだと、本来ならホッとするとところだが、そうもいかない。
じ……………。

いくら質問に答えようとも、ラピスはタケルを見つめることをやめない。授業中も、食事時も、一緒にいるときはいつもこうしてじっと見つめてくるのだ。

タケルは、ラピスがとても苦手だった。

いつの間にかいなくなっただかと思えば、気がつくときそばにいたり、正直ちよつとだけ不気味なのである。特に彼女の瞳が苦手だった。まるで何も見えない深海のように、吸い込まれそうになってしまふからだ。

「……お兄ちゃん」

「？」

「どうして私を見る時に、お兄ちゃんは苦しそうな顔をするのですか？」

「!? そ、そんなことないぞ」

「そうでしょうか。先ほどから私が声をかけた時のみ、心拍数の増加と体温の上昇が見られます。体調が悪いのでしたら、遠慮無くおっしゃってください」

「大丈夫だってっ」

じ……………。

顔を近づけてくる。

タケルとの距離、わずか一〇センチ。傍から見ればキスをしようとしているようにしか見えない。

「そうですか。それならば……………いいのですが」

言いながらもさらにずずいと顔を近づける。

もう距離三センチ。タケルの視線はラピスの瞳に捕まってしまったので離せない。周りの生徒も何故かドキドキしながら、その光景を見届けようとしていた。

が、

「せ、せせせせ席替えを——要求しますわ!」

突然、前の席の少女が立ち上がってそんなことを宣言した。

小さい背丈とセミロングなブロードヘア。トレードマークは頭につけられたウサギ耳のようなカチューシャ。

タケルと同じ雑魚小隊の隊員、西園寺うさぎだ。本当ならばタケルとうさぎは別のクラスだったのだが、犠牲者や退学者が多く出たことから、大規模なクラス替えが行われたのである。このクラス替えにより、三五試験小隊の面々は全員同じクラスになっていた。

うさぎの宣言により、当然教室内はざわめいた。あがり症で人前に出るのが苦手なうさ

ぎが、いきなり意味不明な席替え要請。彼女は普段ならば絶対にこんなことしない。うさは顔を真っ赤にして、肩で息をしながらふるふる震えている。

術式学の担当教師は、ほのほのした顔をうさぎに向けた。

「んあー、西園寺。どうして席替えなんだ？ 今は術式学の授業中であって……」

「え、あ、うと……草薙ラピス……さんは、草薙と兄妹ですし、兄妹で隣の席というのはおかしいではありませんかっ」

「？ おかしいのかね？」

「お、お、おかしいというか——不健全です！」

……………。

(な、なんでだよ……)

意味不明な席替えの動機に、教室内が静まりかえる。

しかし、タケルの疑問とは裏腹に、皆の視線は何故かタケルに向いていた。コソコソと「不健全なのか」「そうなのか」「そうだと思った」「シスコンか」「雰囲気おかしいと思っただわ」などなど、何故か侮蔑の囁きがタケルに向けられていた。

(なんでだよ!?)

タケルは理不尽な皆の反応に涙が出そうになった。女子群からの軽蔑の眼差しも痛いが、



男子群からの嫉妬の眼差しは凄まじい。

鳳桜花という完璧超人まで入隊した上に、さらに追い打ちをかけるようにラピスの存在だ。火に油である。

だが、よくよく考えると席替えというのはいい案だ。

幸い、教師も現状が大変面倒くさくなったのか、席替えの方向で検討しているようだ。

このまま行けば、この絶妙に気まずい局面から脱出でき――

「――嫌です」

ラピスが無表情のまま、タケルの腕にしがみついてくる。

「お兄ちゃんは私と繋がっていないけれど存在を維持できないのです。私とお兄ちゃんの別離は、お兄ちゃんの死を意味します」

………。

おかしい。正しいのに、ニュアンスがおかしい。

「お兄ちゃんは私のもので、私はお兄ちゃんのものなのです」

言っていることは間違っていない。

間違っていないが、そんなものは関係者以外知るよしもない。

「つ、繋がってるって……うそ、やだ」「兄妹でかつ」「離れたら死ぬってくらいに愛して

るのか」「クズめ。自害しろ」「あのエロゲー野郎」

そんな言葉が飛び交った。タケルはもう、しくしく涙を流すしかない。ラピスは不思議そうに首を傾げるだけだし、うさは顔を真っ赤にして口をバクバクさせている。

この空間にタケルの味方はいない。

そう思い始めた時、

「――先生」

背後で、誰かが椅子を引いて立ち上がる音がした。

振り向くとそこには、夕焼け色の髪をした少女。

鳳桜花が立っていた。

「私も席替えを推奨します」

桜花の視線が、タケルに向く。

彼女の眼差しは、やはり軽蔑の色を含んでいた。

「兄妹が隣の席という以前に、授業にこれだけ席を近づけて挑むのはおかしいかと。それに何より、目の前でイチヤツかされると気が散ります。せめて机の間隔を離すように指導してください」

うさはと違い、理由はまともだった。

が、視線が怖い。殺意に近い。このオーラは雑魚小隊の桜花さんではなく、魔女狩りの《紅蓮姫》さんだ。

何故お前が俺に怒る。事情を全て知ってるくせに何故怒る。

ジェスチャーで弁明しようとするも、桜花はふいっと横を向いたまま殺意の波動を放ち続けていた。桜花に伸ばした手を空中に彷徨わせてから、タケルは肩を落とす。

腕を見れば、いまだにラピスがしがみついていた。

ギョツと腕を組み、全くの無表情でじっと見つめてくる。

相変わらず感情が読み取れず、人形にでも扱われているようだ。

ただ体温だけは何故かやけに温かい。

(……これが……孤独、か)

大衆の中の孤独は今まで散々経験してきたが、こういう村八分的な孤独は初めてだった。思いの外、心が寒かった。

続きは9月20日発売のファンタジア文庫で！

©2012 Touki Yanagimi, Kippu